

2016年9月4日 茅ヶ崎教会での分かち合い（ルカ14：25～33）

3月に大阪市の生野教会より転入いたしました、クリスト・ロア宣教修道女会のシスターです。

今日の福音朗読で、一緒について来た大勢の群衆に向かってイエスが「わたしの弟子ではありえない。」と3度言われています。イエスの弟子である私たちへのメッセージは何？

初めは「もし、誰かが私のもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら」と。自分の命とは自分自身のことを指しています。「憎まないなら」とは、イエスよりも愛するならという意味ですので、血肉の絆をイエスよりも大切にすれば、私の弟子ではありえないということでしょうか。

次に「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ」と言われます。イエスに従う者は自分の十字架も一緒にして来なさいということです。私たちは誰でも、「カタツムリ」のように、自分の背中に十字架を背負っていますので、ありのままの状態ですべて来なさい、とされています。

並行箇所として、マタイ福音書の10章37～38節に次の言葉があります。

V37 「私よりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。私よりも息子や娘を愛する者も、私にふさわしくない。

V38 また、自分の十字架を担って私に従わないものは、私にふさわしくない。」と。

マタイではこの後に

V39 「自分の命を得ようとするものは、それを失い、私のために命を失うものは、かえってそれを得るのである。」と。

自分の命とここで言っているのは、自分を中心としてエゴの命で、その命を失うことによって神を中心とした神の子としての命を得るといえるのでしょ。

イエスは次いで、2つのたとえ話をされます。

初めに、塔を建てようとするとき、・・・塔はブドウ園の見張りの塔を指しています。群衆にとってなじみ深いものです。費用がかなりいるので、完成するまでの計算をして、覚悟を決めてから建設するという事です。2番目のたとえは、王が戦いに出かける時です。イスラエルは小さな国ですから、いつも周辺の大きな国から攻められていましたので、戦争が命懸けだとよくわかっていました。負けそうな戦いなら、和平工作をするのは命を保全方法です。この二つのたとえのあとで、最後に弟子の条件のまとめとして、「だから、同じように自分の持ち物を一切捨てないならば、あなた方の誰一人として私の弟子ではありえない。」とイエスは言われます。

まとめますと、弟子の条件は血肉よりもイエスに従い、自分の十字架をそのまま背負って、財産を頼みとせずに、イエスにひたすら委ねてついて行くということでしょうか？

教皇フランシスコが「被造物を大切にする世界祈願日」を決定された、「神様の作品（被造物）を守ることはキリスト者とその共同体の召命である」と。夏に邦訳が完成した教皇回勅「ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に」、散歩道でも扱っています。

この「ラウダート・シ」はアッシジの聖フランシスコの「太陽の賛歌」の中の「私の主よ、あなたはたたえられますように」から取られています。聖フランシスコの太陽の賛歌は、地球、世界は私たちみんなの家であり、同時に「私たちと同じように神からその存在を受けた姉妹、また私たちを腕の中に抱いてくれる母のようなそんざいである」（1）ことを思い起こさせてきます。聖書の教えによれば、私たち自身、土から作られたものである

回勅の160に「私たちのあとに続く人々、また今成長しつつある子供たちのために、私たちはいったいどのような世界を残していきたいのでしょうか」という質問がこの回勅の中心です。「この質問は、ただ環境に関してのみ問われているのではありません。なぜならこの問いは総合的にとらえられるべきものだからです」と。これはさら存在意義そのもの、また社会生活の根底にある価値に対する問いかけでもあります。「何のために私はこの世に生まれてきたのだろうか。また何のために働き、苦勞するのだろうか。なぜこの世界は私を必要としているのか。」「これらの根本的な問いかけなしに、私たちの環境問題に関する配慮は、重要な結果をもたらすことはないでしょう」と教皇は述べています。